



Urawagakuin
High School
Official
Homepage
Topics

2018.3.14 * vol.

Topics 年次サミット 2017
～学習・進学～

編集：広報・企画局



一昨年「浦学年次サミット」が開催、今までのテーマは浦学独自のライフスキル教育、または国際教養がテーマとされてきた。

世相が「2020年大学入試改革」、「ICT教育」を重要視する中、このたび「学習・進学」型のサミットとして、課題の検証、意見交換がなされた。メンバーは、教科指導部・進路指導部・特進推進部・21世紀型浦学教育推進室から構成、前校長で学園顧問の小沢友紀雄氏の教示もいただき、II部では有意義な討論も活発に行われた。

日時 平成30年3月14日 水曜日
15時開会
会場 NEXU 国際・サッカー寮
内容は、議事録を掲載する。
文責 児玉頼昭、坂根 誠
写真 青木秀彦



出席者

学校法人明星学園（顧問）、MJG 心血管研究所所長

小 沢 友紀雄

浦和学院高等学校

校長
副校長、教頭
副校長、Tプロ・特進担当
副校長、事務長
教頭、校務調整推進本部長
教頭、21世紀型浦学教育推進本部長
国際局長、教科指導担当英語科係長
執行部長（教科指導担当）
執行部長（特進推進担当）
執行部長（コミュニケーション英語推進担当）、国際局副局長
進路指導担当副部長
国際局副局長、事務部副部長
進路指導担当課長（1学年）
進路指導担当課長（2学年）
進路指導担当課長（3学年）
特進推進担当 特進学年指導課長
特進推進担当 特進教科指導課長
特進推進担当 特進推進係長（1学年）
特進推進担当 特進推進係長（2学年）
特進推進担当 特進推進係長（3学年）
21世紀型浦学教育研究員、国際教養リソース教育推進担当 生徒活動係長
21世紀型浦学教育研究員、健康と安全推進担当 ISS 推進係長
21世紀型浦学教育研究員、教科指導担当 時間割係長
21世紀型浦学教育研究員、生徒募集担当 募集情報係長

石 原 正 規
高 間 薫
中 熊 清 次
浜 口 妃 敏
小 袋 伸 枝
三 上 幸 子
林 洋 平
植 松 代次郎
倉 成 英 昭
星 野 光 代
菅 原 美 香
石 出 和 浩
高 畑 圭 史
小 山 晋 助
青 木 秀 彦
山 口 晴 司
苅 込 暁 夫
児 玉 頼 昭
新 妻 正 樹
坂 根 誠
大 澤 奈保子
瓜 生 恵美子
大 竹 達 也
中 山 愛里紗

学習・進学 年次サミット 2017

全体進行 浦和学院高等学校 教頭 21世紀型浦学教育推進本部長 三上幸子

1) 開会の挨拶 浦和学院高等学校 副校長 高間薫

本日の執行部会でもタブレットを用いたペーパーレスの会議を行った。今後は教員の取り組みからICT化に向けての改革を進めていきたい。昨今、部活動時間の縮減や教育制度の改革など、教育環境の変化が速度をもって進んでいる。その変化に対応していける本学の取り組みを期待する。



2) 第1部 パネルディスカッション

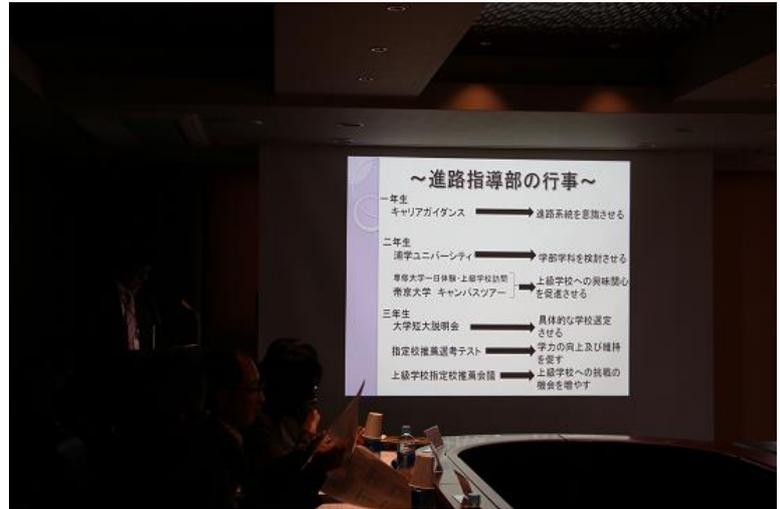
2020年高大接続改革に向けて—現在の取り組みと今後の展開

司会 執行部長（コミュニケーション英語推進担当） 国際局副局長 星野光代

1. 進路指導部

現役進学率は大短で10年連続85%を達成、大学で9年連続80%を達成している。また、大東亜帝国以上の大学（2014年度から四工大も含む）の合格者300名という目標を立て、2015年年度・2016年度は達成している。目標校合格者数に関しては今年度の大学入試の難化による厳しい現状がある。

2020年度の入試制度改革についての取り組みとして、1年次より行われる進学行事の実施によって大学進学への意識向上、より具体的な大学選びの実践を目指すとともに、これから増加していくゼミナール形式の新型AO入試・英語検定を用いた入試への対策、「Classi Eポートフォリオ」導入によるポートフォリオを利用した入試への対策を行う。



2. 教科指導部

生徒の授業アンケートでは、今年度評価が改善し、5段階判定で平均3.6以上を保っている。特に「教員の公平性」・「教員の熱意と意欲」に関しては4.2以上のスコアを獲得した。

入学時基礎学力不足の生徒については、学級担任・教科担任の指導により、補習対象となるものはいなかった。今後の課題として、学習指導要領の変更・ICT教育・英語教育等への対策が挙げられる。

英語教育では、英語検定の促進に力をいれ、受験者数（昨年度894→今年度1342）・合格者（昨年度292→今年度485）ともに大幅に増加した。

3. 21世紀型浦学教育研究室

本研究室は平成28年度に設立し、学習効果と進学実績の向上の両立を目指すものである。昨年度は本校の教育についての分析、今年度は2020年入試制度改革対策として、職員会議の場等を通し、アクティブラーニング・ICT教育についての具体的な事例紹介および課題についての検討を行った。

（新テストの概要、数学・国語の新テスト試行テストの特徴説明）

昨年度は授業時間の見直しに向けた小会議の実施、ライフスキルの成長度合いについてのアンケートを行った。来年度に向けてアクティブラーニング型・ICT型教育の実践のための教員への働きかけ、事例紹介等を進めていく。

4. Tプロジェクト推進局、特進推進部

2020年度に向け、5指導一体型教育・浦学英语教育・ICT教育の中心となるプログラムを基に、3年間完結型教育を目指す特進改革を行う。

従来から導入されているタブレット・プロジェクターを用いたICT教育による効率的な授業展開、本年度1学年より本格導入の、人工知能によりアダプティブラーニングを実現する「Classi Knewton」、英検合格システム「Dig」、英語教育の実践としての、朝の英語多読、英語を用いたアクティブラーニングの総合的な実践の場である「English day」等の取り組みにより、英検合格者数（準2級以上80%）・ベネッセGTECスコア（全国平均から+35～+55点）・模試偏差値（1学年時から2学年時まで+4.9）等に例年を大幅に上回る学習効果が表れている。



来年度よりT特・S特・特進とコース名を変更するとともに、各コースの推薦基準を高く設定したが、単願推薦21名（うちT特3名、S特4名）、併願推薦272名（T特16名、S特39名）という、昨年度以上の入試結果を得た。

3) 第2部 総合討論

21世紀型浦学教育—今後の学習・進路指導の展開について

司会 執行部長（教科指導担当） 植松代次郎

議題1 特進での取り組みをどのように進学に下ろしていけるか。

→（倉成）人数・生徒の理解力等での違いはある。Dig や動画など ICT を用いた教育ならば効果を期待できるかと考えるが、ディベートやグループ学習などの取り組みではしっかりとした方法論が必要だろう。ただし、ICT 機器に関しては生徒の方が上達は早いと感じる。

特進でも最初から実践できたわけではなく、教科担任を学級担任がサポートする形で試行錯誤をして取り組んできた。全体的な教員によるサポートが重要である。

→（高間）英語で体育を行うのはどうか。野球部の修学旅行などでの様子を見ると、身体を用いたコミュニケーションのなかで英語に触れることは効果的である。また、活発な生徒の性質を活かすことで、英語での積極的なコミュニケーションの実践が行えるのではないか。

→（苅込）朝の多読（英語読書）が実践しやすいか。ただし7:50から教員が教室に張り付いて指導することで達成できたものである。進学類型での実践のためには、教員側の取り組みも重要になる。



議題2 2020年度入試制度改革について

→（菅原）「Classi E ポートフォリオ」を用い、ポートフォリオ型入試への対策をしていきたい。リテラシーが導入された際にも担任の負担や取り組み方についての議論があった。10年を経て、教員の指導力への貢献もあったように思う。「Classi E ポートフォリオ」の活用に関しても多くを期待したい。

議題3 21世紀型浦学教育課題について

→（大竹）①進学類型の生徒数の問題、②機材（PC・タブレット・プロジェクター…）特に非常勤の教員が用いることのできるデバイスが乏しい点、③教員の知識向上と研修の必要性の3点が挙げられる。

→（苅込）ICT教育への利用は、情報の遷移が早い。そのスピードについていくための対策、取り組み方法の検討が必要である。

4) 講評 学校法人明星学園（顧問） MJG 心血管研究所所長 小沢友紀雄

リテラシー教育から繋がるコンピテンシー育成に向けての取り組みは、本学の今までの取り組みの延長線上にあると考える。また、21世紀型浦学教育という取り組みでは、論拠を確保しながら、教員への負担を減少できる機器の利用、インタラクティブなコンテンツの活用による学校という場にとどまらない教育環境の確立などについても検討していく必要があるだろう。

現在行われている本学の改革を進めるとともに、科学技術・社会システムの発展と変化とに対応しながら日々改革していけるような取り組みが求められている。

教員も、社会環境に適応しながら自身が創造的な働きができるような能力に気づき、それを伸ばしていくことが求められる。

生徒は、各々の大学進学に応じた能力の開発に向けて多くの課題があるが、本学の今までの取り組みを鑑みると、実践していけると考える。

5) 総括

副校長、事務長 浜口妃敏

本校は大きな改革の中になる。事務として全面的なバックアップをしていきたい。多くの課題やその解決に向けての取り組みが提示された。先生方の積極的な取り組みに期待するとともに、生徒の笑顔を保ち、本学ますます発展していけるよう事務として支えていきたい。

副校長、教頭 高間薫

アクティブラーニングなどの導入などの課題が増えるなかで、学ぶべき知識の量は減少していないという、学習指導要領が提示されている。ICT 機器の活用による授業の速度の上昇等のために、新たな知識の獲得を目指し、生徒とともに学んでいくことが重要であろう。

副校長、Tプロ・特進担当 中熊清次

教育は聞くということから始まる。そのための Dig をはじめ、特進類型での取り組みが進学類型などにも導入され良い影響が生まれていると感じる。

学校法人明星学園（顧問） MJG 心血管研究所所長 小沢友紀雄

OECD からの日本の教員の評価では、研修や勉強会によって教員同士の良い環境が築かれている一方、業務の多忙などの障害がある、勤務時間が長いなどの問題点もある。政府および家庭・社会環境の支援のもと、伝統的な教科指導からの転換を目指せる環境があるとされている。



6) お礼の挨拶 浦和学院高等学校 校長 石原正規

普段の業務、今日のための取り組みが多忙であるなかで、明日のための活動の重要性を意識できた本日のサミットであったと考える。いつも万全の準備ができていく状況で日常の物事が起こるわけではないことと同様で、日々変化していく物事のなかで状況を判断していかなければならない。機器の購入なども含め、現状で最良の状態の作り出すことにこだわらず、今手元にあるものの可能性を探っていくことが肝要であろう。同時に、ICT、アクティブラーニングという形だけにこだわるのではなく、21世紀型浦学教育を確立していくうえで様々な要素を取り上げていきたい。



7) 閉会の挨拶 浦和学院高等学校 副校長 高間薫

多くの課題が提示されたが、その課題が提示されるに相応しい様々な実践を行っていることの証左であると考えている。今後とも新たな実践と健闘を期待したい。

